

Community Welfare Total Care Promotion Project

# トータルケアNEWS

17 2007.2.28

発行 社会福祉法人 秋田県社会福祉協議会  
〒010-0922 秋田市旭北栄町 1-5  
TEL 018-864-2711 FAX 018-864-2701  
URL <http://www.akitakenshakyō.or.jp/>  
E-mail [chiiki@akitakenshakyō.or.jp](mailto:chiiki@akitakenshakyō.or.jp)

## CONTENTS

### 【講演録】

市町村社協事務局長会議講演

「琴平町における住民主体の  
地域福祉実践」

… 2～17

## 平成18年度市町村社会福祉協議会事務局長会議開催 ～ 先駆的实践事例から学ぶ地域福祉実践のあり方 ～

去る2月23日（金）に、平成18年度市町村社会福祉協議会事務局長会議が秋田県社会福祉会館で開催された。

この度の会議は、県外の先駆的実践事例を通して社協における地域福祉実践のあり方を考察しようと“市町村社協管理職セミナー”も兼ねているほか、参加対象には従来の事務局長等の管理職以外にコミュニティソーシャルワーカー養成研修受講者も加えており、合計52名の社協職員が参加している。

なお、本会議では、午前中に香川県において高いレベルで地域福祉実践を展開し、全国的に脚光を浴びている琴平町社会福祉協議会の越智和子業務課長から講演いただくとともに、本会吉田常務理事との対談を行うことにより先進事例を学んだほか、午後には「いま、社協は何を求められ、どう対応するのか。～戦略としての地域福祉トータルケア推進事業～」と題した吉田常務理事からの基調説明などが行われ、今後の社協活動についてはトータルケアを中心とした展開方策が求められることが強調されたところであるが、そのトータルケアの一部を具現化したとも言える取り組みが、この度講演を行った琴平町の実践であることから、この度のNEWSでは、その講義の内容について紹介したい。



## 【講演録】

# 講演「琴平町における住民主体の地域福祉実践」

琴平町社会福祉協議会 業務課長 越智和子 氏

(はじめに)

琴平町は人口1万1千弱で高齢化率が30%、香川県が人口約100万人で、全国で一番小さな県なのですが、その中でも一番小さな町でございます。

金毘羅さんがあるということで、全国区の観光地として観光客が320万人、20年前に瀬戸大橋が出来た時は、400万人位のお客さんが来ていましたが、そういう観光立町であるということは、行政サイドから考えると観光に対する資金と言いますか、社会資源の確保がまず大事なんですね。まず、安全であるということですか、水道とかというようなことは、観光客が不便がないようにということで、消防なんかでもはしご車があるんですね。ホテルが10階建てということとか、普通の住宅であつたらはしご車なんていうのはとんでもないことなんです。消防署にははしご車がある。救急車もかなり高度な救急車を備えてある。そうした所にお金がどんどんつぎ込まれますから、福祉というのは二の次、三の次にならざるを得ない。しかも生活保護率が人口のわりに高く、保護世帯が約100世帯あります。しかも町であるため福祉事務所がなく、県の福祉事務所が管轄になっています。



観光の町ということで、派手で華々しいのですが、実は内情は大変で、ましてそうした保護を受ける方というのは、そうした観光のお仕事で全国からこられた方が、働ける間はいいいんだけど、だんだんその仕事が出来なくなったりとか、生活基盤が無いということで、保護にならざるを得ないという状況がありました。ですから、そうしたことが福祉の中心であった時代が長かったわけですから、琴平の町にとって福祉というのは、あんまり関係のない、どうかするとすぐに寄付を取りに来る、お金がないといつては寄付を取る・・・、私は今でもそうなんです、「こんにちは」と訪問すると「今日は何の金や」といわれる時があつたんですね。共同募金と社協の会費と、あと行政にも引き取って欲しいとお願いをしているんですけども、日赤の社費は社協で集めているので、年に3回は「お願いします。」という感じですね。ですから「今日は何の金や」という話です。それぐらいもう人の顔見たら、「社協は金は取るは、体は使えというは、何もええとこないじゃないか。」という様なことをよく言われたりするんですね。でもそこを、なんだかんだ言いながら、今まで住民主体という名目で地域福祉を進めてまいりました。

(誰もが安心して暮らせるまちづくり)

社会福祉協議会は昭和58年に法人化して以来、“誰もが安心して暮らせる町づくり”という非常に分かりやすいテーマをずっと掲げてきました。それをどういうふうにやるかということ、一人ひとりに寄り添っていこうという、在宅福祉サービスを意味しておりました。

琴平の町は、観光地ということもありまして、医療機関が大変多く、最高時で25の医療機関があり、精神科以外はすべて揃っている町でございました。ただ、今般の医療改革でかなりの病院がなくなりまして、ベッド数も減ってしまいましたが、医療に依存するというのが並々ではございません。

介護保険が始まる平成12年の時も、県レベルの大方の見方は、「介護保険のパンクは琴平が一番だ」と、「あれだけの医療機関がその気になって介護保険やったら、琴平なんかはひとたまりもないぞ」というふうに、声高に噂をしておりました。それは私達も十分に理解するところでございました。

今現在、香川県は8市9町ですが、当時5市38町の行政自治体があり、その43の中で琴平の高齢化率は4~5位に占めておりました。琴平町はどちらかという県内では拓けているはずなのに、なんで高齢化率が高いのか。ひっくり返せば住みやすいんですね。小さいですから。医療機関がたくさんあります。観光の町ですから交通機関が揃っています。金融の窓口がたくさんあります。後で紹介しますが商店街がございます。お年寄りにとって住みやすいんですね。ですから、近郷近在から来て、そこに住み着いちゃったという方がいらっしゃるんですね。そうした町です。ですから、高齢化率が高くて特に特徴なのが一人暮らしの方が多い。一人でいても生活がしやすい非常に利便性のある町、高齢化率で「困った、困った」と言ってたんじゃあ町が成り立たない。だから、その人達をどうやって支えていくか、というようなことがやっぱり重要になってきたんです。

(在宅生活を支える・・・)

その一人暮らしの方達をとにかく支えていこう、一人ひとりの様子を見ながらその人達を支えていこうということで、“病院に行かせないように・・・”というのが、実を言うと隠れテーマでございます。在宅福祉サービスのメインはホームヘルパーですから、当時、午前中なかなかヘルパーの動きが悪く、何故かと聞いたら「午前中はみんな病院に行くんだ」「何しに行く？しかも毎日？」「血压測るらしいよ」「そんな血压ぐらい測るんやったらいいやん」ということで、私が行くから家にいてね、ということで、午前中に行くということにしました。

病院に行かなくていいようにしよう。お年寄りのところへ行って話を聞いていると、やっぱり皆さんそうなんですね、行きたくて行ってるわけではけっしてなくて、家にいたって誰も来てくれないし、さみしいし。それから、行って健康を保ってないと駄目だって言うんですね。だから病院へ行く。病院へ行って先生と顔馴染みに

なっていたら、最後のところを病院でみてもらえるとというのがあるんですね。どういう所の施設でも行きたくない。「琴平でおりたいんや」「ここでおりたい」「ここで死にたい」と言われるんですね。「じゃあ、家にいようよ」「病気もしないようにしようよ」。家で死ねなかったら、施設か病院で死ななきゃいけない。じゃあそれに必要な援助を社協ががんばりましょう…、ということではいろんなことを考えてやってきました。

特に食べること。これは琴平に古くからある養護老人ホームの施設長さんに教えていただきましたが、年寄りの一番の楽しみは食べること、薬よりも食べるのが大切で、点滴をして危篤状態から逃れて、おかゆが口に入るようになったら、もうしめたもの。口から入れば人間で生き延びられる。食べるものがおいしく食べられたら、もうそれで年寄りはいけるといことです。とにかく食べ物にまつわることをいろいろ教えていただきました。

それとやはり高齢期になると病気になります。だから、必要な薬治療は受けなきゃいけない。そのの所がきちっと出来ていけば、家にいることが出来るじゃないか。在宅で生活出来るよね。施設じゃなくってもいいよね…、というようなところをずっと琴平の社協として支えてきました。

#### （在宅福祉サービス（地域自立生活支援サービス）の展開）

今現在、琴平で展開している在宅福祉サービスは、地域自立生活支援サービスも含めて地域で自立するために必要な生活支援を行っています。ヘルパー派遣事業においては認定外もまだまだ多いところですが、そうした方にも対応しており、ヘルパーが行かなくても食事さえあればいいというケースもあるので、食事サービスも行っております。特に一人暮らしの男性は、いくらご高齢でも女性が来るということ、近所にはばかるとおっしゃるんですね。ところがお昼ごはん、出来立ての湯気の立つようなお弁当を届けると、「いやぁありがたい。これはいただきたい。」ということになるんですね。現在食事サービス、配食サービスで基本は昼ごはんでございます。一食350円を頂戴しまして、月曜日から金曜日、毎日その方が望まれる回数を配食しています。この配食が出来るまではみんなが集まって食べる、会食サービスを中心としておりました。やはり一人で食べるとおいしくない…、それを教えてくれたのも地域のお年寄りでした。

ある日ヘルパーが行ってるところの方達と一緒に瀬戸大橋が見える公園へお弁当を持って遠足に行ったんです。その時に、私の目の前にいきなり紙コップを突き出されまして、「お茶」って言われたんです。ドキッとして「なに？」って思ったんです。「このじいさん何を考えてんのや」って、一瞬「ンッ!？」となったんですが、すかさずその方が言われた言葉が、「ええなあ。」って言うんですね。「一人で食べてたらそんなこと言ったって自分でお茶を汲んで飲むだけや、大勢で食べたらいしいな、お茶を入れてもらってご飯みんな食べてたら、これは一番の御馳走や。」って

いう様なことを言われたんです。そうなんやな、毎度毎度一人で食べるということの切なさ、さびしさ、わびしさ、ということがこの人達の毎日をしめているんだな。そしたらせめて週に1回でも2回でも一緒に食べる楽しさ、そんなに御馳走でなくてもいい。梅干、らっきょうでもいいじゃないか。温かい物をみんなで食卓を囲むということが出来ないだろうか・・・、ということで会食サービスに取り組みました。

ただ、元気な間は食べに来てくれます。けど、段々足が痛い、座ることが難しい、また、夏でしたら、昼間のちょうど暑い盛りに歩いていくのが大変だ・・・など、段々来れなくなる方が出てきました。たまに、風邪をひいて来れないと、ちゃんと連絡をくれるんですね。「今日はちょっと行けんのや。」あんまり心配をかけないような言い方をする、だけどこっちが察して、ご飯は？食べれた？準備してる？って聞くと、やっぱりしてないんですね。それならと言って、一人ずつに配膳してあるものを急遽、お弁当箱につめて持って行ったわけですが、それが配食の始まりなんです。来れない人に対して「来れないから仕方ない」ではなくて、「来れないけれどもその人に食事が必要ならそこに持って行かないと駄目じゃないの」ということなんです。そこで配食が始まりました。それは、最初は施設のご協力で、施設で調理していただいて会食をしていたんですが、会食、配食という回数が増えると出来なくなってくる。

そこで、調理をするのを手伝ってくださる方をボランティアでお願いしました。現在、こうした食事サービスが毎週月曜日から金曜日、祝日があってもその日はあります。土曜と日曜日はお休みで、毎週月曜から金曜日、昼ご飯は社協にある。ご飯があるという事はすごく強いんですね。変な話琴平は観光の町ですから、行政で行路病人と呼ばれる方が時々ありまして、こうした方はご飯を食べれてないんで、急いで、ご飯だけは食べさせてあげれるんですね。ご飯だけ食べてもらって、「じゃあ行政に・・・」と、とにかくご飯を食べさす。最近はないんですが、事務局にちょっとフラフラッと来たら、私達職員が先に何を言うかという、「ご飯食べた？」ということをお聞きですね。とにかくご飯さえ食べたら人間幸せになれるという思いが職員の中にも無意識にありまして、「とにかく食べさせなきゃいかん。」と、琴平は貧しかったかどうか分かりませんが、そういうところがあります。

それと、薬なんですね。ヘルパーが行ってるある家庭のご近所の方から「寝込んでるよ、ここのおばあちゃんが寝込んでるから。」と電話がかかってきて、ヘルパーが急いで行くとね、ご近所の方が枕元に車座になって座っている。「どうしたんだ」って言ったら、「よく分からんけど、朝起きて来ない、頭が痛いって言うから私の薬を飲ませた。」って言うんですね、お隣のおばあちゃんが。「これは私が頭が痛い時に飲ます薬だから大丈夫だ」って言うんです。大丈夫だって言ったって、血圧が高くて倒れているのか、低血糖で倒れてるのか、何か分からんけどとにかくいいんだという。自分の薬だからいいというもんじゃないでしょと言いながら、その方も含めてご近所の方と薬談義を始めると、皆さんがものすごい量の薬を持ってらっしゃ

ることが分かります。病院からもらった薬だから大事に置いてあるんですね。調子の悪いときに飲むんです。「そうじゃなくて、お薬というのは先生に言われたとおりに飲まないで駄目なんだよ。」「ああそうなの、でもこれは調子が良くなるから、置いておいて、悪いときに飲めばいいじゃない。」という様なことを当時言ってたんですね。

こうして、これは病院の先生にお話ししなきゃ駄目なんじゃないかというようなことが段々出てきまして、幸い医療との連携が出来ていたので、今、服薬支援ということで、通院介助や通院支援をしながら、一人暮らしの方、また一人で判断が難しい方に関して、服薬の管理なども行っています。

そうしたことをしながら、地域で自立した生活をしていってもらおう、在宅という生活を出来るだけ長く、その人達に続けてもらえるようにしようということで、こうしたサービスを展開しました。一つひとつが別々に出来たのではなくて、それぞれの利用者の方それぞれのヘルパー達の言葉の中からサービスというのが生まれてきました。

(地域での生活を支える )

在宅で生活をするということと、地域で生活するということが、何か違うところがある。何なんだろう。家にいて、そこでそのサービスが届けられて、生活は出来る。でも家から出られない。地域と何のつながりもないというのだったら、施設の部屋だとか、病院の病室でいるのと一緒じゃないか。そうじゃない。そういう所にいないで、地域にいるということはどういうことなんだろう。つまり、高齢者にしても、障害のある方にしても、その地域でずっとつながり、いろんな役割り、いろんな立場を持って生活をしてきているってということなんですね。ただそれが高齢になったから出来なくなってきた。そういう関係が薄れてきた。行く所がなくなってきた。行けないから家にいる。でもそれだと、やっぱり人間って寂しいよね、張り合いもないよね。地域でいるっていうことの意味、施設に入所じゃなくて地域でいることの意味って何なんだろう。社会的つながりというのを支えていかないと、「家にいたいなら家にいなさいよ」だけでは駄目なんだということになりました。

これにもやはり一つ忘れられない事例があります。当時54歳位の女性でしたが、家でほとんど動かなくなると言って、その方のお父さんが、社協に相談に来られました。「娘が夫婦二人で生活しているんだけど、どうも娘の様子が悪くて、病院を勧めるけど行かないんだ。家の中もどうもきちんと片付いていない様なんだよ。ヘルパーさん来てもらえんのだろうか？」ということになって、身体の調子が良くないということだったので、保健師さんと一緒に訪問しました。お話を聞いてると、応接間の所に自分の寝室から布団を引っ張ってきて、そこで休んでました。見ると、その方の寝床まわりに全ての物を揃えているんですね。カセットコンロもあるし、もちろんテレビもいろんな物がある。それから食べる物もある、ティッシュがあっ

て、ありとあらゆる物が手を伸ばせば寝床から取れる様にしてある。「動けない」って言うんです。病院は行きたくないというものの、保健師さんは健康状態を心配されて、病院のことを何度か話したんですね。そうすると「あなたはもう二度と来ないで下さい。」って言うんですね。「私が行きたくないって言ってるのに、何でそんなにあなたは病院へ行けって言うんですか。そんな事を言うんだったら二度と来ないで下さい。」と、保健師さんもその場で厳しくシャットアウトされてしまった。その様子を見ながら私は、じゃあ分かった、じゃあヘルパーさんが来てお買い物をしたり、お洗濯をしたりしたらいいですかね？とりあえずヘルパーが来るということの了解と、申請をして頂いて、ヘルパーが行くことになりました。

結論から言うと、その方は半年後に亡くなりました。最後まで診察を受けることを拒否されました。どうも悪性腫瘍だったらしいです。たぶん乳癌だったんだろうと思います。最後まで病院へ行くことを拒まれました。実は隣が病院なんですけど、それでも拒みました。隣の病院の先生もご存知でした。ただ、医療についてないといろんな手続き上大変な事になるからと言って、お父さんのほうからなんとかしてくれと言われ、本当にいよいよ最後の時に救急車で病院に運ぼうと、救急車を呼んで隣の病院まで搬送してもらおうとしたんですが、それでも彼女は最後の最後まで拒んだんですね。「行きたくない、この家にいたいんや、私はここで死ぬんや。」ということを書いてました、最後まで。しかし私は、「とにかく連れて帰るから、必ずお家に連れて帰ってあげるから診察を受けてよ」と言って病院へ送り出しました。夕方遅くに病院に送り出して、その日の夜遅くに亡くなったから、実は私はその方との約束を果たせていないのです。私は約束が果たせてないということが、今、私の中にはわだかまりとして残っているんですが、何であの人はそこまで家にこだわったのかな、何であそこであの人は死のうとしたのかなと、その時いろいろ考えました。

彼女はヘルパーさん達に買い物を頼む時、自分が食べる物と、それに加えて近所の方の買い物もお願いされるんですね。隣の奥さんの所の法事が近いから、お花を買ってきてとか、そろそろイチゴが出回ってきてそれを隣のおばあちゃんに分けたいから買ってきて欲しいとか、自分が食べたい、自分に必要だという物に加えて、そういうものをヘルパーの買い物の中に1品か2品入ってくるんですね。

それはいいのだろうかということを、ヘルパー達は帰って来る度に言うのですが、「今はとにかく訪問を続けていくということが大事だから、本人の希望に沿っていきましょうよ」そうしたことを話し合いしながら買い物をしました。

ある日彼女の家に行ってきた時に、通りに面した応接間の窓から差し入れがあるんですね、ご近所の方から。お花をくれたり、「おやつ食べる？」って言って彼女が寝てる所に差し入れようとしてくれたり。「ああ、これなのかな？」通りに面しているから、いろんな音が聞こえてくるし、通りを歩くご近所の方の声が聞こえてるんですね。どこか今日はカレーを作っているとか、魚を焼いているとか、夕食

のメニューが感じられる。これが彼女のこだわりなのかな。ああいうことにこだわったのかな。もう聞くことはできませんけど。地域に暮らすってこういうことなのかな、地域にいたいって言うのはこういうことなのかな・・・というようなことを考えさせられる事例でした。

それをずっと支えてきた。後に、保健師さんからは「無理やりにも連れて行かなきゃ行けないんじゃないの？」っていう厳しいことを、人づてに言われました。はたしてそうなのかな？と思っておりますが、ただ、病院の先生は「医療を拒むことも自己選択の時代だよ」と言われました。大変多くの問題を投げかけていただく事例だったんですね。

(医療保健福祉関係者連絡会)

そうしたことも含めて、琴平では医療保健福祉関係者連絡会というものを開催して、一つひとつの事例にあたっています。年に1回程度しか行っていませんが、今年で10年目になりました。参加者にはドクターもいらっしゃいます。病棟のナースもいらっしゃいます。訪問看護のナースもいらっしゃいます。民生委員さんも入っています。介護保険が入ってからはケアマネジャーも入ってきましたが、70人～80人で、社協が抱えている事例、訪問看護さんが抱えている事例、病棟から退院させたくても家族が受け入れてくれないっていう事例。それぞれの立場からいろんな事例を出して、自分だったら、「うちの病院だったら・・・」「うちの町だったら・・・」ということを話し合います。

“うちの町”というのは最初は琴平だけだったんですが、医療圏を考えると隣の町も医療圏に入っちゃうんですね。ですから、医師の立場からすると、琴平だけでなく、出来たらこうしたことを広くしたいという申し出があったので、隣の町と合同でやっています。

社協が主催ということで。相手が“お医者様”ですから、最初の時はもう本当に大変なものでした。いまだにあの緊張感は忘れません。手のひらにびっしょり汗をかきながら、1時間半位だったかな、もっと長かったのかな、よく覚えてないのですが、とにかく話しをしました。そのきっかけになったのも、やはり琴平の中のそうした事例があって、病院の先生にどうしても話しをしなければ前に進めないっていう時に、先生の所に行ったのがきっかけになりました。

今思うと大変ないろんなことがあったなあと思います。今は反対に病院の先生方に「社協とつながらないと地域医療出来ないよね」と言って頂くようになりました。医師会、歯科医師の先生も来ますし、薬剤師会の先生も来られます。ですから本当に、一人の住民を、利用者であったり、患者であったり、お客さんであったりという見方があるのですが、とにかくその人をどうするか、どうしたらその人のためになるのか、という視点をみんなで持とうよということではいろんな事例をここで話します。



今年で10年目ということもあって、県医師会の理事の方が来て、医師の立場から見た介護保険の疑問点や問題点を整理して報告をして下さいました。今、そのように医師会のほうからも講師に来て下さるんですが、第1回の際は、当町にずっとご指導してくださっている大橋先生から基調講演を行っていただき、何で医療と福祉なのかということをお話して頂きました。その辺りから少しずつ医師会が動きはじめて、参加してない病院やドクターには地元の医師会と社協と両方からアプローチをかけ、なんとか全員の医師がこの場に必ず揃うようにという目標を持って、ずっと続けてきています。そこではアンケートもとるのですが、「もう少し長い時間やれないか」とか、「年に数回もっとやって欲しい」などという要望が出ています。それを実現するにはどうするかということ事務局で相談したところ、「うちだけではちょっとそれは無理だから、みんなをもっと巻き込もう」ということになり、今、19年度の取り組みを少し工夫していきたいなあと考えています。

(事例：地域で最期を支えるために…)

このようなネットワークが出来たことで、例えば、92歳と93歳のご夫婦を、社協がキーパーソンになっているいろんな所とつながって支えているという事例があります。

ここの方達も最後まで自宅でと言われたのですが、町内には二人だけで、ほとんど親族のような血のつながった人がいないものですから、現在、介護療養型の医療施設でお世話になっています。

なお、ご主人のほうはすでに亡くなりましたが、そのご主人が亡くなる時に、この方達については、地域が非常に協力してくださるものですから、本人達も葬式はここでして欲しいという希望がありました。ただ、親族がいないのにどうするんだっていう話になったのですが、町内会の人達が、「いやあ、あのおじいさん、おばあさんは長い間町内会の世話もしてくれしたし、自分達もずいぶん世話になったからなあ、葬式は出してやりたいけど、町内会だけで出来ることかなあ…」って言うんですね。そこで、町内会だけで出来ないのだったら、社協も協力しましょうっていうことになって、結局、町内会と社協とでお葬式を出し、納骨もしまして、一周忌もしました。

ご主人のほうが先に亡くなったことで奥さんが一人残り、結局今は施設にいますが、それまで地域のネットワークでこの人達を支え、身寄りがなくとも地域で生活していくことを目指し、ご本人たちを交えて地域の方々と、今後のことを考える検討会も行いました。それは何度も活発に回数を重ね、それぞれの役割分担をしながら、協力してもらえるところ、また必要なサービス、利用できる制度というようなことを模索しながら、ずっと支えてきました。

(地域福祉推進連絡会 ~住民(団体)ネットワーク~)

このような支援が出来たのは、やはり専門家だけのネットワークじゃなく、地域住民のネットワークがあったからこそであり、こうしたものを地域につくっていかねばならないということで、人口1万1千弱の町に、4つの地域福祉推進連絡会という住民のネットワークをつくりました。(こんぴらアイネット、象郷みまもりネット、榎井ハッピーネット、五条(互助)ネット)

この4つの組織というのは、実は昭和の合併前の地域の枠組みで、こんぴらというのは、元々の旧琴平町です。象郷地区はもともと農村地帯でしたが、今は新興住宅地が増えているところ。榎井はまた後で話題になりますが、榎井村だったところですね。五条は五条村だったところで、それぞれが昭和30年代の合併で一つの琴平町になりました。

琴平町というのは合併以前の地域ごとでアイデンティティがあって、琴平町ということに対してあまり一つになれない。それぞれが「我が地域は…」という思いが強く、県社協からは地区社協をつくりなさいという指導を頂くわけですが、琴平は小さすぎて出来ないということと、社協の会長が町長で、その町長のほうから「ただでさえ仲が悪いのに、そんな地区社協なんて分けたら、まとまる話もまとまらなくなるから、それは止めてくれよ。」って就任された時に言われました。

そうしたことから地区社協はつくりたくないままやってきたのですが、ちょうどこの度の合併の話が出たころから、行政が合併すると社協も合併になって、これは大変なことになるなあということになり、そうでなくても、福祉というのは行政の中でどちらかというとい良い扱いではないのに、なおさら行政の規模が大きくなって合理化だっていったときに、福祉は切り捨てられるなあ、琴平の住民ほどわがままな住民はいないのに、それではたぶん社協はどうにもならなくなるなあ。やはり地域の人達が自分達の力で頑張れるようにしないといけない、というようなことを事務局の中でみんなで話しをしながら、じゃあ出来るだけ小地域で、小地域の中でお互いにネットワークをつくって、自分達で頑張れる組織をつくっていかないと駄目だな、というような話しになってきて、4つのネットワークづくりということになったんです。

これは小学校区じゃないんです。小学校は3つしかないんですね。だから小学校区じゃなくて地域の住民の方がそれぞれアイデンティティを持つ地域を1つの区域として、ネットワークづくりをしました。

(住民活動づくり ~ひだまりクラブ(小地域サロン活動)~)

そのネットワークをただつくるだけではなく、それをより意義のあるものにするために、活動をつくっていかうということで、サロン活動ができました。

小地域サロン、いきいきふれあいサロンという言葉があるのですが、琴平ではそれをひだまりクラブと呼んでおり、現在35ヶ所にひだまりクラブがあります。た

だ、社協はこの活動にお金を出しておらず、もちろん行政からも全然出ていません。唯一、毎年12月の第1土曜、日曜に実施しているチャリティーの収益から、年間1万円だけ、各ひだまりクラブにお渡ししています。

このひだまりクラブは、それぞれがいろんなやり方をしています。例えば“おうどんを食べる会”という、何月何日におうどんを食べようという会があり、これがサロンなんですね。ここでは1杯100円でおうどんを出しており、製麺所からおうどん玉を買い、当番の方が汁をつくってねぎとかまぼこを切って置いておくんですね。そうするとみんな100円握ってくるんです。それで、箱の中にチャリーンと100円を入れるんです。それでおうどんを食べるんです。

また、毎月おうどんだけを食べている訳じゃなくて、おうどんを食べるときもあれば、住民グループで写真を撮りに行ったりとか、旅行をしたりとか、絵を書きに行ったりとか、映画もここで上映しているんです。映画と云って、ちょっと古い、大川橋蔵、片岡千恵蔵あたりのを見せて、大きな画面で見せているんです。けれども、何歳以上なんてことはなく、若い人も出てきており、地域みんなが参加している。反対に来れなくなった人には、「おうどんの日よ・・・」と当番が持って行き、それで安否を確認する。「あなたも仲間よ・・・」っていう意識付けをする。だから、おばあちゃんが孫を連れて来てますし、次は何をしようという話し合いもする。それをここにいらっしゃる方達が、リーダーになってやっている。「うどんばかりもどうかな、今度は蕎麦でも打ってみるか。」とかいうことを話したりする。

一番最初にサロンの説明に行った時に、そこには今、沢山の本や雑誌だとか、写真があるんですが、非常に殺風景なただの集会所だったんです。机と座布団しかなかったんです。そこに、あるホテルから「越智さん、ソファがいくつもあるんですけどいらんか？」と言うから、いると言ったら、10脚位くれたんです。そこで、サロンのほうへ「いる所はないですか？」と言って、いるというところへ持って行きました。足が痛くなって、下に座れなくなってきたら、ソファがいいだろって、置ける所はソファを置いたんです。そういうふうに、段々、段々、いろんな物を増やして、みんなが自分達で居心地のいいものを作って、年に1回か2回しか開けなかった集会所が、今はもう毎月、2度3度開くという状態になっています。

どのサロンでも、みんなで何とかしなきゃという意識ができており、回覧板が回らないとかゴミの問題など、サロン活動の中からのいろんな話し合いを、自分たちの問題として話しが出来るようになってきたし、リーダーの方がいろいろ工夫してみんなを楽しませる。そのためにはやはり100円から300円の自己負担もある。

ただ、どこのサロンも、女性は来るけど男性の参加は少なく、リーダーさんは男性に参加していただくために、年に2回ほどはアルコールのある内容にするなど、男性を集めるのに非常に悩んでいるところがあります。

(住民活動拠点サービスステーション「ちょっとこ場」)

こうして、それぞれの小地域でのたまり場をつくと同時に、琴平町にある唯一の商店街に、住民活動拠点サービスステーション「ちょっとこ場」というフリースペースをつくりました。

そこは、元文房具屋さんだったところで、商店街の真ん中の四つ角の文房具屋さんだったのですが、その道を真っ直ぐ行くと、金毘羅さんの参道につながっています。この商店街は他聞にもれずシャッター街になってはいますが、私達が高齢者の方や、障害のある方を地域で支えるのに、商店街ってすごく重要なんですね。スーパーでのお買い物はお年よりは苦手で、やっぱり商店街、行き慣れた所へ行きます。少し認知症が始まった方がウロウロ出来るのも商店街なんですね。そこがどんどん寂れていってなくなるといことは、生活自体が厳しくなっていくということ。だから、商店街に何とか頑張ってもらいたいという思いがあって、商店街にそうした人が集まる場をつくろうと、日本生命財団から助成をいただいて、“ちょっとこ場”というのをつくりました。

今、ボランティア連絡会議の事務局になって、そのボランティアの皆さんによって、毎日、入れ替わりで運営をしてくださっています。これも非常にユニークな活動です。商店街が一番喜んでくれました。人が寄って来る。今まで閉まっていたシャッターを開けてくれた。それまで、地域通貨を社協がやろうとした時に、反対したのが実は商店街だったんです。何を間違ったのか、通貨という名前がついたものだから、商店街に対して悪影響を及ぼすような企みをしていると伝わったらしく、割引をさせようとしているとか、何かちょっと間違った理解をしちゃったものだから、いまだに地域通貨、せっかく作ってるんだけど、半分眠っているような状態で、今度4月にイベントをする中で、子ども達を中心に地域通貨をまたやろうとって、若い人達が小さな小さな試みを積み重ねながら、地域通貨を進めていこうとしているんです。そのいわくのある商店街が、“ちょっとこ場”に関しては、すごく喜んでくださいました。

ただ、この商店街は普段は誰も通っておらず、観光客が来た時だけはすごいんですけれども、通ってない時は本当通ってない。猫の子一匹通らないというのはこれなんだなと思うんですが、高齢者が買い物途中に寄ったり、グループホームのお年寄りの散歩の中継点であったり、もちろん観光客の方も来ます。1日の一番多い来客数の記録が、約480人であったと思います。また誰も来なかった日というのが1日ありましたが、その日は当番の方が寂しかったと言っておりました。あとは誰かしらが必ず来てくれます。子ども達もここへ立ち寄ります。

先週、ボランティア連絡会議の総会があって、“ちょっとこ場”のことも話題になりました。子ども達にどう声をかけていこうとか、“ちょっとこ場”の運営をもう少し考えていかなきゃいけないんじゃないとか、住民の方達がもう自分達の活動の中心、重要なこととして主体的に頑張ってくれます。

(防災・防犯(マップ)ネット)

住民の方達がつながっていくことのひとつとして、琴平では防災・防犯マップづくりをやってきました。社協の集まりという、寄ってくるのが高齢者の方が多いですよ。それは、昼間に会を開くと若い方が来ることができないということと、若い人が興味を持つようなテーマが少ないからです。だけど、高齢化、少子化という町の状況を考えていく中で、子どもとお年寄りをただの受身的な立場に置いておくという訳にはいかない。社会の中での被害者になるのは、子どもとお年寄りです。

そこで、子どもとお年寄りを中心に地域がつながっていく、そしてお年寄りのすごさを子どもたちに知ってもらおうということも必要だなあということで、防災は皆さんお分かりだろうし、防犯もそう。子どもを守る、不審者から守る。私にも子どもがいて、不審者情報というのが小学校からくるんですよ。ところが、仕事に行っているのに下校時、気をつけて下さいという通知を持って帰ってくるんですね。「どうしろっていのよ」という気がするんです。学校としてはそう言わなきゃいけないから、ご父兄のほうで、下校時注意して下さい。子どもに注意しなよと言うけれど、子どもがいくら注意したって、どうにもならないって考えた時に、登下校の道筋で、子どもが逃げ込めれる所があったらいいな。逃げ込むだけじゃなくって、顔見知りを作っておかないといけないなと思ったんですね。

それを私が思ったのは、お休みの日だったか、商店街に買い物に行って、花屋さんへ寄ったんです。近傍から車を引いてくる花屋さんで、元々琴平の人じゃないんですが、その方がずっとお花を売ってるのは知っているけれども、私はあんまり声をかけたことがなかったんですね。ところが、その花屋さんから声をかけられました。「奥さん、彩(アヤ)ちゃんのお母さんでしょ。」と言うんです。彩って言うんです、娘は。「いつもあいさつしてくれるんですよ。」と言うんですね。うちの子を知ってくれてるんだと思うと嬉しくなって、つい花をいつもの倍くらい買いましたけれども、「つながってる、子どもがつながってる、安心だな。」その日の夜娘に話しました。「あの花屋さん知ってる?」「知ってる。学校の帰りにいつも声かけてくれる。あいさつしてる。」「じゃあ困った時、その花屋のおばさんに頼めるな?」「頼める。」これだな。

親がいくら知ってたって、子どもが知ってないと駄目で、子どもと親が知っているということが、大切なんだなっていうふうに思いました。そういうふうにつながっていかないといけない。それをやっていこうというのが、“防災・防犯マップ”で、小地域でやっています。

子どもを中心に子どもの目線でやろう。子どもと保護者。それから、それにまつわる民生委員さん、福祉委員さん、自治会長さん、ボランティアさんが参加して、10人1チームでずっと歩いていって、防災・防犯マップを作る。小学校区ごとにやりました。今年から見直しをする時期に来ています。これをしながら、やっぱり、お母さん達の中に、私と同じように「子どもと一緒に地域に参加しなきゃいけない

な、子どもと一緒に地域の人に顔を覚えてもらわないといかんということに気がつきました。」という若いお母さんも出てきました。お年寄りの中にも「子どもの顔を知ってないといかん」と言ってくれる方が出てきました。

あいさつ運動などと学校で教えても、子どもがあいさつしない。不審者と間違われるから声をかけても知らん顔をしている。そんなこと言わずに声をかけて下さいねということを言いながら、防災・防犯マップを作り、地域で小さな小さな、本当に身の回りのネットワークを作っていく、こういう活動を重ねていくことが大切だと思います。

#### ( 地域での生活を支える )

地域の中で様々な場をつくる。その場の中に、病院もあれば、入所施設もあって、家の回りにその人を支えるいろんなネットワークがある。このようなことをしないと地域で生活をしていくということ、それを支えるということはできないんじゃないかということで、今はここを目指しています。

先程の高齢者夫婦の事例でも、二人を支えていくというのは、実は点と点を線でつなぐのではなくて、もうすでにこの二人を支えるネットワークが出来ていて、そこに社協が協力をした。弁護士さんが成年後見人として二人を支えた。医療がその人達の健康を支えてきた・・・というふうになっているのだろうな。このような支援のネットワークというのをいつもつくりながら、地域の中で共に生きるネットワークとして、小地域がある。専門家たちは、一人ひとりの人を支えていける専門家集団としてのネットワークをつくりながら支えていく。これが琴平の目指すネットワークなんだろう、共に生きる、誰もが安心して暮らせる町に近づけていくことではないかなということで進めて参りました。

#### ( 住民参加による地域福祉活動の推進 )

平成8年に“ふれあいのまちづくり事業”に取り組むことで、福祉総合相談という窓口が出来ました。それまでの週に1回民生委員さんが来て相談対応するという“心配ごと相談”から、月曜日から土曜日まで、社協の職員がまず相談を受け付けるというものになり、それに民生委員や弁護士さんが、いろんな形で応援してくれます。

でも、まず社協の職員が、地域から来たいろんな相談、困りごとを、ちゃんと受け止めていく。それが在宅福祉サービスにつながるし、地域福祉を進めていくということにもつながっていく。そのためには、広報活動や情報提供もやらなければならない。ボランティアとして出てきた人達に、ボランティア学習をしなきゃいけない。福祉教育というのは何も子ども達のことだけじゃなく、大人もお互いに関連のあるものとして、回っていくようにしないといけないし、それを整理しなきゃいけない。そして、これが地域福祉活動の推進、社協本来の仕事ということになるんで

すけれども、これもどう見ても住民の方が動いているんですよね。ひだまりクラブもそうですし、福祉委員制度もそうで、今150人の福祉委員がいらっしゃいますが、これも住民の方です。あとボランティアですね。ボランティア連絡会議は20団体と15人くらいの個人のボランティアさんがいらっしゃいますが、これも住民の方ですよね。“ちょっとこ場”も住民の方なんです。“地域福祉推進連絡会活動”これも地域の役員さんを中心にやっているんです。

整理しながら「あれ」って思ったんです。地域福祉活動推進と言いながら、社協職員よりも地域の人達を動かしているんだな。動いてくれているんだな。動き始めたんだな。また、在宅福祉サービスは？と思った時に、これもそうなんです。琴平の場合、介護保険サービスは公的なものですから、これは職員がやりますが、琴平社協独自のサービスは、だいたいが住民の方の協力が入っているんです。あとボランティアさんが一時預かり、子育て支援したり、ゴミ捨ての生活支援があったり、外出支援があったりというので、こうしたことは住民の方がボランティアでやっています。在宅福祉サービスも住民の方が支えてくださっています。琴平の町は住民の方が動いてくれています。

#### （福祉サービス利用支援）

あと、社協の新しい事業である“福祉サービス利用支援”として、成年後見制度の利用支援や日常的な金銭管理等支援サービス、地域福祉権利擁護事業などは社協が頑張らなければいけないもので、特に“安心サービス”というものでは、葬式までやりましたが、こうしたものもやらなければならない状況になってきています。病院と社協、そしてケースワーカーから、身寄りのない方だということで、もうすでに3人の方の葬式をさせられています。

これは93歳の女性で一人暮らしの方からの言葉なんです。「どうなるんやろ？わたしはどうなるんやろ？」って、顔を見る度に言われるんです。私達は生活のことだと思って、「心配せんでも大丈夫。病院の先生も来てくれるやろ。ヘルパーさんも来るやろ。大丈夫やで。近所の人もおるやん。」そんな風な事を言っても、どうも違うんです。それでも「私はどうなるん、どうなるん」と言うんです。よくよく話しをしながら、考えてみると、自分が死んだらどうなるか？ということなんです。自分が今まで親のお墓を守ってきた。家のこともちゃんとしてきた。けど、私が亡くなると後はどうなるの？それが心配だと言うんです。それにふっと気が付いた。「分かった。もう心配せんでええ。」葬式してあげるって言ったんです。口からポツと出たんです。「もう心配せんでええ。全部してあげる。」そうしたら、目がキラッとなって、「そんなら安心したわ。」って言ったんです。年寄りって死んでからも心配なんです。その方は、権利擁護事業や成年後見制度など、様々なサービスを通して、最終的に社協が面倒を見ますということになったんです。お寺さんのほうからもちゃんと協力いただくという“安心サービス”、これを確立していこうとい

うふうになっています。

(福祉教育、ボランティア学習)

これについてはこれから重点的に取り組むということですが、これまで続けてきた“こんぴら地域福祉セミナー”はじめ、地域の人たちが自分のことなんだと考えることができるように地域福祉を学ぶ。福祉は他人ごとじゃない、自分のことではないかということを読んでいく。“シャントセナの集い”もそうです。これもニッセイ財団の事業をいただいた中から、「一人ひとりがシャンとしよう」「頑張ろう。」「自分のことは自分で決められるようにしよう。」「お互いに支えあえるようにしよう。」「分からんことをみんなで勉強して、何かからでも始めよう。」と、認知症の問題をテーマに、“シャントセナの集い”開催しました。医師から病気としての認知症について説明がありました。その後、お母さんをずっと介護している家族から介護についての報告がありました。最後に80名程度の参加者がグループに分かれ、認知症についての話し合いをしました。予定していた時間をオーバーするほど、みんながいろんなことを話し合い、自分が親を面倒みたことなど、思いがけない人が認知症について泣ながら話す姿も見ました。そうしながら、認知症になってもみんなですべていける地域づくりを考えました。

従来は社会福祉大会といわれているものを、我々は地域福祉を考える住民大会と言っており、それまでは講師をお招きしての講演だったものが、平成に入ってから地域での実践を発表する会となっています。最初の頃は、福祉教育協力校や子ども達のそうした学習体験を発表してもらっていたのですが、今年は子育てを考えるというテーマにしています。いろんなテーマで、地域で今住民の方がやっている実践を発表するということになっています。

アンケートもとっています。社協に対するお叱りもいっぱい頂いています。課題もたくさんございます。みんなでまた考えていこうということにしています。決して、子ども達だけの福祉教育ではない、こういうことをこれから社協がやっていくべきだと強く思っています。

(法人経営等)

法人経営も本当に大変です。合併しない分大変です。これも頑張らなきゃいけない。今、会員は、一般会員が500円、賛助会員2,000円、特別会員10,000円。賛助会員になって下さいって、事務局通信なんか書いて一人二人と増やしています。特別会員をお願いしますとって、事務局長が今地域を歩いています。

“ちょっとこ場”を中心に、うまく観光につながって、財源が確保できないかな、せめて“ちょっとこ場”の運営費くらいは自分たちでつくりたい。ボランティアの方達がいろんなことを考えてくださっています。



(おわりに・・・)

こうした事業を続けながらも、香川県全体や、ほとんど琴平と人口や高齢化率が変わらない隣町では医療費の平均伸び率が上がっているのに対し、琴平では医療費が上がっていません。介護保険もそんなに伸びていません。当初パンクするであろうと予測された状態にはなっていません。

医療と福祉と住民が、一緒になって考えて、介護保険を使って、利用をしている。これが今の琴平のそうした結果だと思います。

なお、社協の建物は“地域福祉ステーション”としており、あえて“地域福祉センター”とはしていません。

ステーションとは、つまり“基地”“前線基地”です。とにかくここに来て、何か問題があったら、何とかここに駆け込んできて、みんなで考えて、ここにあるものを持っていこう。みんなからいろんなものを頂きます。冷蔵庫の古いものとか、お布団とか、いろんな物を届けてくれるんです。それを、一応預かって、必要な所にまた持っていきます。

人が集まります。必要なところに人が出て行きます。ただないのはお金だけ。現在使用している建物も実は保育所だったんですが、少子化の波の中で、廃園になったところを社協が利用させて頂いているのです。“ステーション”を中心に、私たちは今地域福祉を進めています。



琴平町社協（地域福祉ステーション）の外観